

A-3. 「せみって目がキラキラしてるで」 常盤会短期大学附属泉丘幼稚園(大阪府堺市) <5歳児 夏>

はじめに

本園の子どもたちは、木々や草花、色々な虫たちと触れ合うことで、季節をそのまま感じることができる。夏はせみの声がそこら中の木から聞こえてくる。そんな中、園長から「お泊り保育で夜のお散歩に行きましょう。せみの幼虫をみつけに行かない? せみが成虫になるときを子どもたちに見せてあげたい」と提案があった。年長担任の2人とも、せみが成虫になるところは図鑑や写真で見たことはある、本物はみたことがなかったので興味津々であった。

事例

1. せみの幼虫って夜にでてくるねんで

お泊りの話し合いで「お泊り保育でみんなどんなことしたの?」と聞いてみた。「花火。ゲーム。探検などなど」「お泊り保育でしかできないことないかなー」というと「夜の散歩やなー」という意見が出る。「じゃー夜しか見られないもの探しに行こうか。何がつけられるかな?」という、虫大好きなN児がすかさず「先生、むしみつけにいこ!」とのってきた。「夜に見つけられる虫ってなんだろう?」とかえすと今度はK児が「ぼくみつけたことあるで。せみの幼虫な、夜にでてくるねん。」という、他児も「僕も知ってる。」「僕も。あのな、家に持って帰ったらだんだんせみになるねん」と言い出した。「先生見たことないから、見てみたいなー」と言うと「じゃーお泊りでみつけにいったらええやん。僕いてるとこ、教えてるわ」と言い、みんなでみつけに行くことに決まった。

2. そうっとそうっと、やで

お泊り保育まで、教師達も子どもたちがうまくせみを見つけられるように、せみの出てきそうな穴があいたところや、幼稚園の行き帰りに、下見をしていった。出勤途中で見つけてきた幼虫を職員室のカーテンにつけて、どのくらいで成虫になるのか時間を見たりもしたかったのだが、かわいそうにどの幼虫も途中で死んでしまい、結局、教師達は、お泊り保育までは成虫になったせみに会うことはできなかった。お泊り当日では成功するように、せみを入れるものは、何かに引っかかったりしないものがよいのではと、透明のプラスチック容器にした。持ち帰ったせみは木に登っていくのと同じ条件になるよう、カーテンを移動できるハンガーにかけよう準備をした。子どもたちにはせみの図鑑や絵本を置いたり、インターネットでせみの検索をし、脱皮の様子を写真で見せてくれるサイトをだし、部屋に張っていた。せみに関する紙芝居を見たり、誕生会では園長がせみのおはなしを素話で聞かせてくれたりもした。

お泊り保育当日。い



よいよ外が暗くなりだし、教師達の導入で子どもたちがせみ探しに行く。「いた!」子どもの声のほうにいくとせみのぬけがらを指している。「みんなみてY君が見つけたの。こんな風にの中に穴が開いているよ。この中からあがってくるから、こんな木のところさがしてごらん。」

そういうと子どもたちは同じ種類の木を探し出す。「どこかで、うごいているかもしれへん。歩いてるかもしれへんなー」しかし、せみの殻はたくさんみつかるものの、動いている幼虫はなかなか見つからない。教師も子どもも必死で探す中、「あっ、動いてる!」の子どもの一声で一斉にみんなが集まる。「ほんとだ、木に登っていつてる」「そうとよ。そうとそうと…」と容器に入れる。



「見つかったねー」「まだどこかにいてるかなー」といっていると、子どもたちの様子を見ていた散歩に来ていた地域の方が「ここにもおるよ」と知らせてくださる。「これで2匹や」2匹とも同じ大きな木(桜の木)に止まっていたことから、「大きな木にいてるみたいやから。大きな木探してみよ」「さっきいたせみと、おんなじ木さがしにいこう」といって探す子どももいる。「いた!」さっきよりもっと大きな桜の木に止まっていた。合計3匹のせみが見つかる。容器を持っているのは、虫が大好きなN児。運ぶのも慎重でゆっくりと歩いている。「そうとやで、そうとあるかないと死んでしまう」それまで先頭をきって歩いていたN児であったが大事そうにもって、とうとう最後尾になってしまった。「このせみな、うまれたら、にがしたるねん」といっている姿がとてもうれしそうで、いい表情であった。



3. せみが大人になると、みんながねむるの、

どっちがはやいかな？

幼稚園に持ち帰ったせみを用意したカーテンにつけると、せみがどんどんカーテンを登っていった。3匹とも無事に元気にあがっていく。そして子どもたちが布団に入った頃、せみも脱皮の準備をはじめた。1匹目の殻からせみがでてきて反ったようになっていたところをみる事ができた。子どもたちは目をまん丸にしてその姿を見ていた。「せみさんも明るいところと外に出られないからでんきをけすね」のことで消灯する。まだまだ見たいな—という気持ちが顔に表れているものの、すぐに何人かは眠ってしまう。



眠れない子どもは、廊下においているせみを見に来る。じっとそばでその様子を見て「うごいてる」「こっちはまだかな」「がんばれ、がんばれ」など3匹を比較しながらみつめて、布団に戻っていく。

入れ替わりながら眠れない子がせみの様子をのぞきに来るとは布団に戻り眠ってしまう。それを繰り返して、全部のせみが脱皮を始める頃には、もう全員がぐっすり眠ってしまった。

4. せみどうなった？

子どもたちが全員起きる朝6時30分には、一匹目のクマゼミが、カーテンから離れ廊下を飛び出していった。「先生、窓開けてたら逃げてしまうやん」「いいやんか。せみはちょっとしか生きられへんねんで。好きな所に飛んでいったらいいねん」と言い合いになるが、「お友達みんなで見送ってあげようか」と教師が言うとみんなも賛成。「つかまったらあかんで—」子どもたちが全員無事に幼稚園にとまることが出来た日、3匹のせみたちも元気に飛び立っていった。



考察

お泊り保育のひとつの計画で子どもたちとせみの幼虫を探してせみになる様子を見せたいという、教師の思いが、子どもたちの思いと重なって実現できた。暗がりで見つめ、持ち帰り、成虫になるまでを一緒に過ごすという貴重な体験の中で、子どもたちはいろいろな発見をした。子どもたちの気づきや思いを考えていきたい。

- ◆ 幼虫がいる場所を探すうち、1匹目のせみと同じような木を探したり、穴や抜け殻などめあてを持って探すようになった。
- ◆ はじめは誰もが見たい触りたいという気持ちは一緒であるが、観察していくうちに触ってはいけないということを教師が何度も言わなくてもよくなり、なぜ触ってはいけないかをわかり子ども同士で注意しながら約束を守っていた。
- ◆ せみについてよく知っている子どものことばに耳を傾け、せみの生態に興味や関心を更に深めていった。
- ◆ せみの成長にかかわり、命の大切さに気づいていった。



まとめ

せみの成長を目のあたりにして、子どもたちが羽化するということに興味をもち、せみの成長が自分たちのお泊り保育に取り組むという思いと重なってより身近なものになった。教師も子どもたちと一緒に感動を体験することができた。生き物は、子どもたちを心落ちつかせたり、つかまえた喜びを与えてくれたりする。しかしその生態をよく知らずにむやみにつかまえてもすぐに死なせてしまうことが多い。実際今回のお泊り保育が終わり、預かり保育でせみとりに行ったが、どの子もつかまえたせみをすぐに逃がしてあげていた。こうした小さな命とのかかわりを繰り返していく中で、命の大切さを感じとってほしい。

ポイント

お泊り保育の夜の散歩。そこまでに至るまでに、保育者の思いと子どもの思いが重なりながら進んでいく様子がよくわかります。子どもにじっくりと観察する機会を与え、子どもの気づきや発見をキャッチし、興味へのきっかけとなるような遊びの環境を構成する教師の援助があり、子どもたちの感動体験に繋がっています。